忠を竭すべき旨起請文を書しるかつ京都
城信徒小鍋小波道沐下案内しる石川
日向守家成ハ言須口より土呂右衛門
参入りしハ一揆大小用意しけるを家成
大事小氷野野州波多野を駆小嘆所
ものの如小嚴重の仕置を下すべ完仁の
政を施行し一揆等罪を許し後ふたを
呼寄しハ幽徒ハ干戈を投げ伏躍し即

ち降服す　國胤大業廣記

一　石川日向守家成ハ後殿使を抑世家成ハ
永禄七年三州設楽郡一宮の城小本多百
助を籠置けり小今川氏ハ二万少くとも
諸勢
公廿二歳の時初めて二手係り後詰と
して出陣氏真武田信虎小八手
の人数を引くれ見を押へんとて遠州元目

小いくさをけるを
公其勢を奚割一宮に古者あるく百助を
召連て是籠城に古帰陣ありけるとき
世家成後殿とくに二子の兵しく八千の
敵を左右に分し跡の氏共八千を含軍して
静小俣を持く退く
公日本安及の名於く世小俣を治ふ一
つ八日州家成ら人数扱を小を抜く大を

押に掠むるこまく分くのこと

一 永禄七年今川氏共一宮の砦をせむこるを
市ものる本宮百助伝彼是籠小援兵をこ
ひけるに迷小出るあり海方烈しく戦
いく勝利を得しに石川日向守家成本
多百助大久保七郎右衛忠世等海前小石
北今日の戦海方微兵少く今川ら大軍を
追ふつ氏共ら目前小く寇亮の者六人

（績武家閑談 太平雑話 武徳祐木抄）

を討取り各〻馬前に於て軍忠を励む
うか（）年之の憤を散し欽仰堪すと
ともに感しなきを得ざる所絶を賜
ひて陣所小隠りて疲労を慰もへしと
仰下さる　大二川志　玉朝大業廣記

一　永禄十二年六月廿二日遠州金平宅し
はて織川城を石川日向守家成に賜ふ
うのとき麾下の士加藤彩左衛門同彩七
郎同三十郎吐録十二人を家成の組に属せ
らる是ときさ二州一国の士を二組に配し
て石川日向守酒井左衛門尉忠次小笠原
和三河の松平源次郎松平宮内内藤源次
右衛門平岩七之助鳥居忠吉本多二郎同越中守ハ
石川の組なり然るに今度家成織川の
城を攻るに諸侯設を以て同苦伯耆守
数正に譲りて二隊設とあり　武徳編年集成
大二川志

一元亀元年十月廿日信長援軍越しく
依て永禎の兵く勢田美濃の多小戦ハし
む我兵日く矢軍のみしく戦を挑む敵無
我寡勢なりを侮る四面を圍み攻る軍
急なり酒井忠次石川家成等先小進ん
て戦ふ半二十四回勇気いよく振ふ永禎
の勢小薄弱して大小を和を請く信
長小許り伝長深く家成忠次伊右等の

功を賞す　大三河志

一元亀三年十二月味方原の戦味方利を
失ひしも
神君漸く危急の難を逃れさせ給ひ
浜松城へ帰せ給ふ法しく甲陽の魁将山
縣昌景馬場信房逆兵を率く徳川勢の
迫るを追拒け玄黙口を追詰ふ小田川表
く帰せ給ふ城内廣く何ぞ人命を

尽す只内外小篝火を焚續けるのみ
なりけるに山縣八馬場より云ふ人歟無為小
故小て門の扉を鎖さず暫らくと見え
たり遂小全く城を攻落すべきなりと勇み
ますます馬場信房等思案して敵兵より利
を失ふ為小城中へ逃入るとハ門を閉ず深あぶ
板をも引く要害を使て防へき事なり
今城門を開き篝火を焚く物を結ぶを
為く出張りて味方を城内へ偽引入る一
人も殘さず討殺さんと計りなれども若大将
ましまして
徳川殿八當時英雄なれ共卒尓の働なり
たり悲く板子を踏ふ全入るへしと怪
錄に所小城内に居屋敷海道迄
日吉十郎板井居助勝成基文等なりと初て
しく全敵の勇士を能人徳の種なりとなふへ

鬨を叫んで突て出る玉薗銃を尤篝火あり
いまだ外暗くして見分かたく甲州の猛卒
大勢の中へ濱松の小勢弱いなれど家康
彼方へ濱を攻戦へた敵味方を分ち国士
軍に及ひたり此時居ハ勝頼の麾下四
郎小縄城門を出ひ出て大声揚て
下知を為て矢叫ひの声を聞て大
久保源井の雄臣猛卒二百餘人を率て
蒼に突て切て玉陰に横槍卍の字に張
立て戦に折しも城門を石川日
向守家成ハ
神君旗に信玄の為に二の丸に及て
卒を伴へ出て城に猛卒少く残しを
人数三百餘人を率して池来て向
小男八郎を馬場山縣の後服を固を作り
切て全て寸八伏勢を以て作て

りの馬場山縣り軍兵ども嘩く岸り引退
く濱松勢潮ともやあふと退立こ〻田兵を二
百餘人付々て勝岡を作りく引退せこる場
山縣と名乗の扇廣澤山普濟寺なる城
焼拂ひ味方原へ引退へ張陣せこ 法朔大業廣記

一元亀三年十二月廿二日石川日向守家成八樹川
城をちりけるり今日味方の敗軍を見く兵を
率て暁方小濱松へ入本ら

神君大小古感あこる時小家成信りるハ去る
十四日の夜家成り家人義人るハ一老翁一句
の和歌を吟ちて甚小嶺の松雪小靡き
さるのんあこる老翁後ひく甚んを解て曰
く雪ハ信玄りり松を
神君りり一旦松を靡ども他日雪ゆりて
清んとき〻義人小告ちる今日味方
敗ちる小及ひく兵少りる者霊義なる小

事を語るを加へ当日の敵を後日の吉とせん
ものを欲し恢々勇わるる　武徳大成記

一　天正元年癸酉正月武田信玄吉を待ち刑部
小輔を屯し濱松を襲んとして石川家成之
方策の敵績小氣を屈せて松濱松よりく
吉凶凛然たるに容易に伺ふ所なきを
察し東郡を伐んと七月刑部を養て太息
一　天正元年三月三州可久輪の城をく石川

日向吉久野之郎左衛門宗能吉を是を攻
り寄せ小暁方小及ひく城溺り塀柵新薙
せしらえ之を一宮の支城八味方の旌旗を
たるるをしく逃去り数若忽ち溺る
　　国朝大業廣記

一　天正元年九月長篠城小松平外記を入れ
勝頼を遠州小出張しく伏見小屯り二侯
乾宮明天方をく良等の城くの制法を定

ゆきぬ

家康公の分國を巡り来て懸川乃城をめぐり居るこの城中にたやすくはなきまゝと見えけれども攻るに及ぶて甲州へ帰らんとす懸川の城代石川日向守こゝを空く退散を新坂の山中に流し旗鉾を立てゝ勝軍を打しにたるに勝軍にあらずす勝軍周章てゝ馬場を軽き

を山中小入こゝをくらいし　三河記大全
参陽実録